

第130回貴重書展示

源氏物語のこどもたち



尾形月耕画 源氏物語薄雲

平成24年1月19日(木)～2月9日(木)
鶴見大学図書館 エントランスホール

鶴見大学図書館・源氏物語研究所
後援；紫式部学会・武蔵野書院

あけましておめでとう存じます。

新春恒例の貴重書展示が源氏物語研究所の担当となって、もう10年ほどになりましょうか。当研究所の最大の仕事は一と改まって申しあげられるのもおかしなものですが、『源氏物語』とそれに関連する分野について、質のよい古典籍を収集し、書物に即した的確な調査を行うことにあります。大衆伝達手段に乗って華やかに打ち出される言説や、あるいは犀利を装った所謂現代的な議論は、しばし人目を驚かすことはあっても所詮根無し草、すぐに次の流行に取って代わられます。時を超えて学問を支え、豊かな源泉となって研究を潤し続けるものは、古典籍をおいて他に見あたりそうもありません。研究所はこれまで蓄積された蔵書の錦にさらなる花を加えるべく、限られた予算を最大限有効に活用し、目録を眺め回し古書肆を訪ね、検討を重ねて書物を集めます。その結果、学界のみならず一般にもよく知られるところの、本学の優秀な貴重書コレクションが形成されました。長い間離ればなれになっていた書物が、ここ鶴見で再び一緒になる、といったことも起こります。これも継続的な集書の成果です。

さて今回は、『源氏物語』の中から誰もが心惹かれる可愛らしい存在にお出まします。「小さいからだに大きな望み」ではなく、力一杯懸命に、遊び、働き、褒められたり叱られたり、目の離せない登場人物たちの活躍を御覧下さい。

平成壬辰青陽中浣

源氏物語研究所

高田 啓

*立案・解題は高田の担当です。ご意見・ご感想など、是非お聞かせ下さい。また、図書館の典籍のみでは足りない箇所に個人蔵の資料を提供していただきました。ご協力に感謝します。

源氏物語のこどもたち

展示目録

* = 個人蔵

I 二人の小君

- | | |
|-------------------------------|-------|
| 1 紫文蟹之囀 享保8年(1723)刊 | 袋綴5冊 |
| 2 奈良絵 空蟬 江戸時代前期制作 | 額装1面 |
| 3 源氏物語絵巻 夢浮橋 幽遠斎筆 天保2年(1831)写 | 卷子本3軸 |
| 4 十帖源氏 江戸時代前期刊 | 袋綴10冊 |

II ちいさな光源氏・夕霧・薫・匂宮

- | | |
|-------------------------------------|-------|
| 5 源氏絵尽大意抄 天保8年(1837)再版写 | 袋綴1冊 |
| (参考)*源氏物語五十四帖絵尽 豆本 文化9年(1812)刊 | 袋綴1冊 |
| 6 伝飛鳥井雅章筆源氏物語 桐壺 江戸時代前期写 | 列帖装1冊 |
| 7 伝冷泉為相筆源氏物語 須磨 鎌倉時代後期写 | 列帖装1冊 |
| 8 絵入源氏物語 横笛 慶安3年(1650)跋 承応3年(1654)刊 | 袋綴60冊 |
| 9 伝尊証法親王筆源氏物語 幻 江戸時代前期写 | 列帖装1冊 |
| (参考)掌中源氏物語 天保8年(1837)刊 薄様刷横本 | 袋綴1冊 |

III こどもの宮仕え

- | | |
|-------------------------------------|--------|
| 10 三源一覽 零本 卷二 室町時代後期写 | 袋綴1冊 |
| 11 伝嵯峨本源氏物語 朝顔 古活字版 慶長頃(1596~1615)刊 | 袋綴1冊 |
| (参考)絵入源氏物語小鏡 明暦3年(1657)安田十兵衛刊 | 袋綴3冊 |
| 12 升型本源氏物語 螢 江戸時代中期写 | 列帖装53冊 |
| 13 源氏百人一首 天保12年(1841)刊 | 袋綴1冊 |
| (参考)源氏物語系図 伊達家旧蔵 江戸時代中期写 | 袋綴1冊 |
| 14 源氏物語 浮舟 江戸時代前期写 | 未装継紙1巻 |

IV 女君のこども時代

- | | |
|---------------------------------------|--------|
| 15 伝寂蓮筆源氏物語断簡 若紫 河内本系統 鎌倉時代後期写 | 台紙貼1葉 |
| (参考)源氏物語五十四帖 一蕙斎芳幾画 明治14年(1881)大倉孫兵衛刊 | 折本2冊 |
| 16 源氏物語抄(紹巴抄) 葵 古活字版 寛永頃(1624~1644)刊 | 袋綴20冊 |
| 17 源氏物語 薄雲 江戸時代前期写 | 列帖装1冊 |
| (参考)*源氏五十四帖 薄雲 尾形月耕画 明治25年(1892)横山良八刊 | 1枚 |
| 18 絵入横本源氏物語 初音 万治3年(1660)刊 | 袋綴29冊 |
| (参考)*金泥下絵源氏物語 初音 江戸時代前期写 | 未装列帖1冊 |

源氏物語のこどもたち

解題

* = 個人蔵

I 二人の小君

『源氏物語』には、「小君」と呼ばれる少年が二人登場します。それぞれの姉と男性主人公とを仲介する重要な脇役であり、異父兄弟姉妹を持つ複雑な家庭に育った点も共通しています。光源氏を手引きする空蟬の弟と、薫大将の手紙を運ぶ浮舟の弟。碁に興ずる女性を垣間見るところは、物語中もっともよく知られた場面のひとつです。

1 紫文蚕之囀 享保8年(1723)刊 袋綴5冊

銀泥草花文様下絵の縹色原表紙(縦27.2、横18.8糎)。中央に朱紙題簽(縦18.7、横3.5糎)を押し、「紫文蚕之囀 摘趣(〜うつせみ)」と刻す。四周単辺(縦18.9、横3.2糎)、各冊題簽右下に「カ」と小さく墨書。見返し、本文共紙の楮紙。本文は四周単辺(縦23.5、横16.9糎)内に毎半葉11行(第1冊摘趣)・15行(第2冊きりつほ以下)、上方に頭書用の欄(約6.0糎幅)を設け、漢字平仮名交じり、ほとんどの漢字には振り仮名を施す。各冊巻首に「阿波国文庫」「不忍文庫」の朱蔵書印あって、屋代弘賢(1758~1841)の旧蔵たることを証す。国学者・能書・蔵書家として知られた弘賢は、阿波徳島出身の儒者柴野邦彦(栗山、1736~1807)と交流があり、その縁で膨大な量の書物を徳島藩主蜂須賀斉昌(1795~1859)に献上、「阿波国文庫」の重要な構成要素となる。

版心「紫文摘趣 一(〜十二終)」。享保6年(1721)8月15日釣酔子(多賀半七)序、同8年9月刊。刊記「享保八癸卯季秋良辰／甲陽府中仕官／作者 多賀半七／甲州府中柳町三町目／清水九左衛門弁事／武江日本橋南壱町目／須原屋茂兵衛梓行／此次に夕かほ若むらさき全部4冊追而板行」。江戸須原屋が実質的に制作担当したのであろうが、三都以外の出版例として珍しい。原装のまま伝来した銀泥下絵の特装本である。摺刷佳良だが版木に小欠損を見、やや後摺か。版心からは、ある段階で「紫文摘趣」の題号を付した可能性がうかがえる。

『源氏物語』の本文を俗語に改め、さらに頭注を施した点が新機軸ではあるけれども、少し作品への関心が高まると、よりどころとなる原文を別に用意しなければならなくなるので、結局読者にとっては二度手間。あまり流布しなかったのは、原文を欠くところが好まれなかったゆえであろう。出版は空蟬までの5冊のみ、しかし宿木に至る稿本72冊分が残る(静嘉堂文庫)。

展示箇所は、碁に興ずる軒端萩と空蟬を、光源氏が垣間見るところ。光源氏・軒端萩・空蟬以外の登場人物も室内のこしらえも江戸風になっており、平安時代の面影はない。この趣向は**15(参考)源氏物語五十四帖**に顕著である。

2 奈良絵 空蟬 江戸時代前期制作 額装1面

型押し金箔を雲形に加工し、画面上下にあしらった極彩色大和絵(縦57.8、横47.3糎)。金箔散らしの霞は後補らしい。顔料の落剥もなく保存良好、元来は屏風であったか。豪華絢爛の姿が偲ばれる。屏風もしくは障子絵を軸や額、または画帖に仕立てる例は相当多いので、この種の資料調査にあたっては、現在の形状にとらわれない考察が必要で

ある。絵の全体は純然たる大和絵だが、画中の襖や屏風の絵は狩野派風の唐絵。このような技法の併用は、奈良絵本にもしばしば見られるところである。

軒端萩と空蟬を垣間見する、光源氏17歳の夏。源氏から顔のよく見えるのが、軒端萩であろう。源氏の脇には空蟬の弟小君が立つ。『源氏物語』の本文に「白きうすものひとへがさね、二藍の小桂だつものないがしろに着なして、紅の腰ひき結へるきはまで胸あらはにばうぞくなり」と描かれる軒端萩はかなりの略装であったはずだが、この絵では、整った女房装束の姿で描かれる。

3 源氏物語絵巻 夢浮橋 幽遠齋筆 天保2年(1831)写 卷子本3軸

薄手楮紙(縦28.6、横38.0糎)に、原則として『源氏物語』各巻1図を描き、全54図を3巻に仕立てるが、橋姫巻に2図あり、次の椎本巻の分を欠く。継紙状態で伝来し、朽葉色絹表紙と牙軸は当館に入ってから調製である。外題は貞政少登先生(本学名誉教授・前独立書人団理事長)の揮毫。

上巻冒頭に「源氏五十四帖 探幽」と墨書した楮紙(幅約5糎)。汚れの状態から見て、もと端裏書であったものを巻頭に張り継いだのであろう。さらに1紙(幅約28糎)を続けて「五十四帖／引歌／山路露／系図／爪印上／同中／同下／以上六十帖／探幽法印筆／天保二卯年十月中旬／幽遠齋写」の識語。これに従うならば、狩野派の巨匠探幽(1602～1674)の原画を、天保2年(辛卯、1831)に模写したことになる。しかし各々の図柄と「五十四帖／引歌」以下の文言からすれば、**8絵入源氏物語**を典拠としていることは確実である。探幽が版本の挿絵を範として作画を行うこともありえないではなかろうけれども、他に文証なく、ただちには首肯しがたい。

上巻13図・中巻20図・下巻21図の内から、浮舟の隠れ住む小野の庵を選んだ。室内に尼君と対座する浮舟、簀の子には小君が座る。『源氏物語』本文は、薫大将からの手紙を読まないで返すことになっているが、この絵の浮舟は、なんと熱心に読んでいる。また浮舟が尼そぎでないところも、おもしろい。典拠となった絵入源氏物語では、手紙が曖昧に描かれているので、左手に広がる寂しげな風景とともに、絵師の解釈によって掲出本のような図柄になったのであろう。巻末に「天保二年十月中旬／幽遠齋写之(瓢形朱印)」の奥書あり。

4 十帖源氏 江戸時代前期刊 袋綴10冊

縹色地に紗綾形・唐草文様を空押しした紙表紙(縦27.5、横19.8糎)、その中央に素紙題簽を押し、「十帖源氏 一(～十)」と刻す。原装・原題簽の美本、惜しいことに最終冊の外題を欠く。掲出本は無刊記。他本に「万治四年卯月吉辰 荒木利兵衛」の刊記を持つものがあって、成立の上限を万治4年(1661)に定めうる。さらに跋文の字句から、撰者立圃還暦の承応3年(1654)まで絞りこめるであろう(渡辺守邦説)。

冒頭に、大齋院おおさいいん選子内親王より物語の新作を求められ、琵琶湖に浮かぶ月を見て須磨巻を構想する有名な紫式部伝説が掲げられ、次いで『源氏物語』本文の抄出、巻末に六条院と二条院の略図・登場人物の系図を載せ、撰者の跋文で締めくくる。手軽に物語全体を俯瞰出来る便利さも評価の対象だが、何より立圃自身の手になる古雅な挿絵131面によって、『源氏物語』関連版本中屈指の名品とされる。

撰者雛屋立圃(野々口氏、1595～1669)は雛人形の細工を家業とした俳人で、書・絵画・文章のいずれにも長じた。跋文に「年来心にしめて…物語のよしある所々に絵をかきそへ、我身ひとつのなぐさめ」とする由が示され、作品への深い愛着が自ずから書物の形をとったと言えよう。寛文10年(1670)には姉妹編の『おさな源氏』も刊行され、こちらには120面の絵がある。

展示箇所は最終冊の見開き。右側には簀に座す小君。左側は六条院・二条院の図である。立圃の描く小君は、装束・表情ともに味わい深い。小君ひとりを屋外に据えて浮舟との距離を暗示する、巧みな構図といえよう。

II ちいさな光源氏・夕霧・薫・匂宮

どんなにもっともらしい顔をしていても、過ぎた日を振り返れば、皆こども。あどけない表情の小さな存在は、物語の中でどのように変わっていくのでしょうか。厭世的でまじめな近衛大将薫にも、よだれをたらして筍にかじりつく時代があったのです。

5 源氏絵尽大意抄 天保8年(1837)再版序 袋綴1冊

縹色地に葵・源氏香等を型押しした紙表紙(縦17.8、横12.0糎)は原装、左肩の楮紙題簽(縦13.0、横2.5糎)。そこに、朱の子持ち枠と朱の題号「源氏物語絵抄 全」を刷る。見返しは右半分を破損、「溪斎英泉画／書肆甘泉堂梓」等の文字が残る。第1丁オモテは、「抑此源氏物語は光る源氏の君の事をしるす故に題号とす」以下13行の序。第1丁ウラから第3丁オモテまで多色刷り「近江八景石山の秋月」の図とし、第3丁ウラに李園主人再版の序「此源氏物語の事は往昔より貴賤となく人々の好める事」以下11行が続く。

第4丁オモテより本文。やや太い4周単辺(縦15.5、横10.2糎)を2段に区切り、上段に源義弁引抄・紫文要領・更級日記・狭衣物語・僻案抄や関連の和歌を多彩に引用、下段は各巻の名場面を源氏香・代表的和歌と共に視覚化する。小冊かつ入門書ではあるが、編者はなかなかの学識を備えた人物であろう。絵入の入門書を多く紹介する大著『絵とあらすじで読む源氏物語』(小町谷照彦)に、詳しい解題あり。

序文末尾と本文第1丁オモテを展示。御簾の向こう側には桐壺帝、裳・唐衣装束の女性に抱かれているのが、赤子の割に髪の毛の多い光源氏である。左側に座っているのは桐壺更衣か。

(参考)*源氏物語五十四帖絵尽 豆本 文化9年(1812)刊 袋綴1冊

朱地紙表紙(縦9.1、横6.2糎)左肩に縹色題簽(縦6.0、横1.6糎)を押す。子持枠内に「源氏五十四帖絵(以下破損)」と刷る。原装・原題簽の愛すべき豆本である。伝本は比較的稀少、書名は内題による。

見返しを置かず、巻頭色刷り見開きの図。序文1丁半の次ぎに飾枠の扉があり、「引歌／源氏物語五十四帖絵尽／香ノ図」

展示箇所は巻頭部分、文机に肘をついた少々行儀の悪い紫式部が描かれる。湖に浮かぶ月を見て須磨の巻を着想したという、石山寺伝説の図である。

6 伝飛鳥井雅章筆源氏物語 桐壺 江戸時代前期写 列帖装1冊

白地にオモダカ・花の丸を織り出した銀欄表紙（縦16.8、横17.1糎）の中央に金泥龍文刷り斐紙題簽（縦11.0、横3.0糎）を押し、「きりつほ」と墨書、本文とよく似た手ではあるが、同筆か否かを判じがたい。見返し、金揉箔散らし。料紙、斐紙。墨付き35丁、每半葉10行15字程度。本文系統は青表紙本、特に肖柏本・三条西家本と近い。扉に古筆別家3代了仲の極札「飛鳥井殿雅章卿きりつほ〔守村〕」を貼る。ウラ面に記入なし。

掲出本の伝称筆者飛鳥井雅章(1611～1679)は、江戸時代前期の公卿中屈指の能書、歌人としても名高い廷臣であった。掲出本は雅章の筆跡に似ているが、より細く優しい風体であり、別筆であろう。雅章周辺にいた女性の書写かもしれない。

展示箇所第29丁ウラ(見開き右面)に「十二にて御元服し給ふ／みたちおぼしいとなみてかぎりある／ことにことをそへさせ給ふ一とせの／春宮の御元服南殿にてありし」の文章が見え、清涼殿での宴、左大臣の後見と続く。光源氏こども時代との決別である。

7 伝冷泉為相筆源氏物語 須磨 鎌倉時代後期写 列帖装1冊

厚手斐紙に墨流しを施し、金銀切箔・野毛等の装飾ある古表紙（縦17.5、横17.1糎）。外題なし。見返しには銀切箔を密に蒔く。料紙は中世前半期の特色を示す厚手白斐紙。每半葉9行16字前後、和歌2字下げ2行書きとし、その末尾は直接地の文に続く。朱の合点・本文書写とほぼ同時期の片仮名書き入れあり。合点は引歌のある箇所につ。現状では、須磨巻4括り分に伝称筆者を同じくし、近接した時期の書写にかかる帯木残巻1括（仮表紙とも10丁）を添える。

須磨本体はおそらく巻首1括り分を脱しており、「わかればかうのみや心づくしなる」



から始まる。本文系統は青表紙本だが、大成底本に対して細かい異同を見せ、近年紹介された甲南女子大学蔵の伝冷泉為相筆本紅葉賀とは装丁を同じくする僚巻。米田明美『源氏物語古写本梅枝 紅葉賀』に書影の一部と解説あり。ただし筆跡は両者異なる。

47丁オモテ8行目以下「わか君のなにとも世をおぼさで／ものし給かなしさをとおとゞのあけくれに／つけておぼしなげく」を展示した。頭中将が源氏に夕霧の様子を語る。5歳の夕霧では、父親の流謫の事情を理解出来そうもない。

(甲南女子大学蔵本と同種の表紙)

8 絵入源氏物語 横笛 慶安3年(1650)跋 承応3年(1654)刊 袋綴60冊

紺色無地紙表紙（縦27.0、横18.2糎）中央に素紙題簽（縦16.7、横3.4糎）を押し、巻名・巻序等を刻す。本文に匡郭なく、每半葉11行21字前後。句読点・濁点を付刻、まま人名・官職名・地の文と心内語の区別等も傍記し、読みやすい本文を提供している。絵は片面・見開き両様、四周単辺（縦18.7、横14.5糎）内に山本春正の手になる大和絵風の画面。

物語本文54冊、山路の露1冊・系図1冊・引歌1冊・目案3冊を加え、これに豊富な絵を添えて出版、以後の写本・版本に大きな影響を与えた。4源氏物語絵巻もその1例である。夢浮橋巻末に「承応三甲午稔八月吉日／洛陽寺町通／八尾勘兵衛開板」の刊記。おそらく初印は慶安3年であり、掲出本はそれに続くもの。刊行を企画した山本春正（1610～1682）は当時著名な蒔絵師、松永貞徳（1571～1653）の弟子となり和歌にも堪能であった。

横笛巻の見開き右側、中央に童姿の薫、その前には筍（たかうな）が盛られる。筍は朱雀院から女三宮へ送られたもの、目ざとく「立ち寄りて、いとあわただしう取り散らして、食ひかなぐりなどしたまへば…筍をつと握り持ちて、しづくもよゝと食ひぬらしたまふ」2歳の薫が描かれる。秀抜な行文である。

9 伝尊証法親王筆源氏物語 幻 江戸時代前期写 列帖装1冊

濃紺地に瑞鳥・唐草等を艶刷りした紙表紙（縦26.0、横18.2糎）の中央に金銀泥下絵斐紙題簽（15.1、横3.2糎）を押し、「幻」と墨書。この外題は本文と別筆である。見返し、本文共紙。本文料紙、斐。見返し右上に楮紙片（縦11.9、横3.4糎）を押し、「源氏之巻 尊証法親王御筆／式卷ノ内」と墨書、本文・外題とは別筆。全3括、綴糸は緑の太絹を用いる。

巻頭に遊紙1丁を置き、次丁オモテより書き始め墨付25丁、末尾に遊紙2丁。每半葉10行19字程度。行の中央に朱の読点、引歌の箇所合点を施す。和歌2字下げ2行書き、その末尾は直接地の文に続く。朱点を持つところからすれば、河内本であることが期待されるけれども、その本文は青表紙本系三条西家本・肖柏本に類する。

伝称筆者尊証法親王（1651～1694）は後水尾天皇の皇子、承応2年（1653）青蓮院門跡を相続し、寛文9年（1669）天台座主となった。青蓮院門跡歴代と同じく、能書の聞こえが高かったとされる。掲出本は大ぶりの書型や豪華な題簽などから見て、身分の高い人物に書写を依頼した典籍であろう。濃墨を走らせた闊達な書風は確かに貴頭にふさわしいけれども、尊証法親王の筆跡資料が少ないので、伝称通りかどうかはなお判断を留保したい。むしろ法親王より一時代上がった筆跡のように思われ、2冊あったはずの残りの巻の行方が知りたいところである。

見開き左面7行目途中から「わか宮まろがさくらはさきにけり／いかでひさしうちらさじ木のめぐりにちやうを／たてゝかたびらをあげずは風もえ吹よら／じとかしこう思えたりと思ひての給ふ」と、匂宮の無邪気な思いつきが語られる。この時、御年6歳。成人後の、押しの強い色好みぶりはとても想像できない、可愛らしさ！

（参考）掌中源氏物語 天保8年(1837)刊 薄様刷横本 袋綴1冊

薄様刷り全69丁の構成は、著者尾崎雅嘉（1755～1827）の序（1丁）・発端以下源氏物語概説（1丁～7丁ウラ）・人物一覧（8丁～54丁オモテ）・故事一覧（54丁ウラ～68丁オモテ）。刊記「天保丁酉歳正月／京 額田正三郎／江戸 須原屋茂兵衛／大坂 葛城長兵衛」左脇に「薄用摺 美濃紙摺／本出来御座候」を刻す。本文は、4周単辺（縦5.8、横14.6糎）内に22行前後。版心に「○ 一（～六八終）」と刻し、しばしば「十」を省略した数字表記が使われる。

登場人物一覧や特殊な記事一覧をイロハ順配列として検索の便を図るのは、いかにも『群

書一覽』の编者らしい工夫である。現在よく見られる50音順人物索引の先駆けとして、高く評価してよかろう。展示箇所は「に」の部。冒頭に「匂兵部卿宮」を掲げ、その系譜・略伝が記される。

Ⅲ こどもの宮仕え

男の子も女の子も、平安時代の宮仕えは大変。雀の子を逃がしてしかられたり（10三源一覽）背丈より大きな雪玉を作って手がかじかんだり（11伝嵯峨本源氏物語 朝顔）するのは、まだ我慢の仕様もあろうと言うもの。今回は展示しませんが、「もののけ」を調伏するための「よしまし」役（若菜下）となると、大人でも嫌でしょう。それでも、子どもたちは元気に『源氏物語』のあちこちを走り回っています。

10 三源一覽 零本 卷二 室町時代後期写 袋綴1冊

黄土色無地の具引紙表紙（縦27.2、横22.0糎）、上部に押発装の痕跡を残す。ただし布目紙を朽葉色に染めた後表紙は、補修に当たって新たに添えられたもの。表紙左肩に素紙題簽（縦15.5、横3.5糎）を押し「三源一覽 二」と墨書、本文とは別筆。

見返し、本文共紙。巻頭に遊紙1丁、次丁オモテより每半葉16行28字前後に書写、末尾には遊紙なし。掲出本は全10巻中の第2巻に相当すると思われる。

『源氏物語』の代表的な古注釈である『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』の3つの書物を抄出し、60巻に及ぶ大部の書物を利用しやすい形とした。『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』それぞれの引用は、左合点・中央の点・右合点によって区別し、『花鳥余情』を典拠とする項目が最も多い。ただし、朱点を落とした箇所も見られる。便利な書物であり、三条西実隆（1455～1537）にわざわざ序文を依頼したものだが、あまり流布はしなかった。明応5年（1469）成立。なお、编者富小路俊通（?～1513）の伝記と著述の経緯については、井上宗雄博士「三源一覽の著者富小路俊通とその子資直と」（『立教大学日本文学』17）に詳しい。

展示箇所は、若紫「いぬき」の注。見開き左面5行目から「いぬき 犬君也上東門院の上童に有此名見栄花物語此物語あてきなれきなどあり／きの字は公也君也内裏結番の女房上臈をば何房中下臈をば何君と書云々」と説明する。これは『河海抄』当該項目の節略引用で、本来あるべき注の頭の朱点がないのは、打ち忘れか。

11 伝嵯峨本源氏物語 朝顔 古活字版 慶長頃(1596～1615)刊 袋綴1冊

香色無地具引紙表紙（縦27.2、横22.0糎）中央に雲母にて唐草を刷った高雅な題簽（縦18.2、横2.9糎）を押し、「あさかほ」と光悦流に刻す。右下には「二十」の墨書。押発装あり。全20丁、每半葉11行22字程度（印刷面縦約22.5、横17.0糎）、本阿弥光悦の書風を汲む闊達な版面が印象的である。なお古活字諸版の異同および本文については、今後の研究に俟つところが多い。

嵯峨本と称されるだけあって、装丁・活字とも見事であるけれども、惜しいことに虫損が見られる。巻首に「瀬能／蔵書」「飯山／八幡／宮／之印」「臨野堂文庫」の朱文印あり。前田夏蔭門下の国学者瀬能正路（1807～1870）旧蔵。昭和50年東京古典会主催の入札会に出された時に

は51冊まとまっていたが、散逸。当館では、掲出本の他に花宴以下11冊を集めた。

第16丁オモテ(見開き左側)10行目「池の氷もえもいはずすぎにわら／はべおろして雪まろばしせさせ給」は、二条院の庭での雪遊びである。もともと光源氏と紫上は暖かい室内から眺めるだけ。

(参考) 絵入源氏物語小鏡 明暦3年(1657)安田十兵衛刊 袋綴3冊

藍色無地紙表紙(縦27.2、横19.5糎)左肩に素紙題簽(縦18.2、横2.9糎)を押し、子持枠中に「絵入／源氏小鏡 上(中・下)」と刷る。原装丁・原題簽ではあるが、書物全体に疲れが見られる。本文は匡郭なく毎半葉13行20字程度。版心、文字なし。挿絵は四周単辺(高さ21.5糎)。しかし通常の絵入り本が半丁単位で構成されるのとは異なり、図のある面に3行分本文が入り込むのを例とする。古風な様式か。下巻末尾に「明暦三年丁酉仲秋吉辰／洛陽誓願寺前／安田十兵衛開板」の刊記。



『源氏物語』梗概書中最も伝本数の多い『源氏小鏡』は、享受史的にも文献学的にもおもしろい研究素材である。掲出本は古本系第1系統に属し、絵を入れた最初の小鏡。この本を受けて、小型絵入り本も刊行される。

有名な雪まろばしの場面を展示した。火桶を前に部屋の中でくつろぐのは光源氏と紫上。雪の庭の女童はいかにも寒そうで、同情したくなる。

12 升型本源氏物語 螢 江戸時代中期写 列帖装53冊

藍色地に瑞雲を織り出した緞子表紙(縦16.6、横18.1糎)中央に金箔・金泥装飾の斐紙題簽(縦11.0、横2.7糎)を押し、「桐つほ」以下の巻名を一手にて墨書、本文とは別筆のようである。見返し、本文共紙。各冊巻首に遊紙1丁、そのウラ面に巻名の由来・内容等を略記する冊もある。本文料紙、斐紙。毎半葉9行14字前後、和歌1字下げ2行書き、その末尾は直接地の文に続く。朱の合点・句読点、墨書き入れ、巻によっては朱片仮名の注も見える。書き入れは引歌・補入等である。本文系統は青表紙本。全巻を一筆で丁寧に写し、和歌の書き入れも多い良質な古典籍であるが、惜しいことに帯木1冊を欠く。

40丁ウラ(見開き右面)最終行「わらはしもづ／かへなどさまようさうぶがさねの／あこめふたあひのうすものゝかさ／みきたるわらはべぞにしのたいのな／めり」は、玉蔓づきの童たち
なお、右から2行目「いとよしある官人おほかる」の朱合点と墨書き入れ「有」は、「官人ある」の本文との対校結果であり、異文は三条西家本の特徴を示す。

13 源氏百人一首 天保12年(1841)刊 袋綴1冊

薄藍色無地紙表紙(縦26.0、横17.9糎)の左肩に朱地題簽を貼るが、現在その下半分のみ存(縦約10.0、横4.5糎)、子持枠内に「首 完」の文字が見える。見返しは4周単辺(縦20.6、横15.0糎)を3行に割り、「黒沢翁満大人著／源氏百人一首 完／江戸書林 千鍾房 金花堂 玉山堂 合刻」と刷る。次いで天保9年橘守部序(1丁)・天保11年前田夏蔭序(2丁)・同藤原定美序(2丁)、編者翁満の「惣論」(8丁)が続く。本文は桐壺帝から小野尼まで

123人を選び、物語の進行順に並べた62丁。親しみ深い『百人一首』の体裁に倣い、『源氏物語』の大意を簡便にまとめ、図も『百人一首』風に描かれる。忍藩の重臣であり、才知あふれる国学者黒沢翁満(1795?～1859)の作。

この『源氏百人一首』には、一般には気付かれていないようだが、多くの問題がある。まず2種の刊記があること。その1は「天保十年己亥十二月発行／松軒田靖書…玉山同梓」(62丁ウラ)。続く「武蔵国埼玉郡忍藩／黒澤翁満先生著述書目」(2丁分)の後ろに「天保十二年辛丑年正月／発行書林 芝神明前／岡田屋嘉七(以下8名)」。天保11年の序文がある以上、「天保十年己亥十二月」に刊行することは無理だから、「天保十二年辛丑年正月」の方が事実を伝えていよう。しかし不可解な刊記の状態はうまく説明できない。

さらに大きな問題がある。通説(和泉書院影印叢刊『源氏百人一首』菅宗次解題)では異版がないとされているけれども、世上によく見かける『源氏百人一首』は、123人すべての頭部を改刻した後出本であり、改刻前の版は稀少。掲出本は早い版に属する。改刻で最も際立つのは、目を細めるか開くかの差である。頭部の埋木改刻以外は旧版の板木を襲用する。

49丁ウラ(見開き右側)の「馴木(なれき)」を展示する。姉妹が桜の木を賭けものとして碁を打つところに登場する。馴木は姉大君に使える女童で「さくら花匂ひあまたに



(掲出本の馴木)



(頭部を改刻した馴木)

ちらさじとおほふばかりの袖はありやは」を散らし書きし、上方に人物や状況の説明を付す。早期刊行された掲出本と、後出改刻の異版とを比較していただきたい。

(参考)源氏物語系図 伊達家旧蔵 江戸時代中期写 袋綴1冊

金銀泥にて草花・土坡・霞等を描いた布目紙表紙(縦32.2、横22.5糎)は、若干の落剥があるものの大名家伝来の典籍にふさわしい堂々たる風格。5つ目綴じの表紙左肩に「源氏系図」と外題を打ち付け書きするのは、本文と別筆か。押発装あり。雲紙に墨流し、さらに金泥下絵の見返しも制作当初のままである。巻頭右上に「伊達伯観瀾閣図書印」の朱印が押され、東北の雄藩伊達家旧蔵を語る。本文料紙、厚手斐紙。墨付29丁、遊紙なし。奥書・識語等はないが、書風から見て江戸時代中期の書写であろう。

本文は淡墨の4周単辺(縦22.5、横19.2糎)中に7行の界を引き、界に2行あて書写する。漢字・平仮名交じり、漢字にはまま片仮名にて読みを付す。朱の系図線あり。

通常系図末尾に置かれるから「不入系図人々」の部分を省略し、「太上天皇」から「花散里」までを写す。本文のあり方から見て、山本春正の**絵入源氏物語**に含まれる文亀3年本系系図を利用したものであろう。したがって本文研究上の価値は高くないけれども、享受史や書誌学的な意味は重い。

展示箇所は第8丁オモテ(見開き左側)の、式部卿宮(紫上の父)―源中納言―若君と続く家系。若君の説明に「朱雀院御賀のしがくの日皇ワウシヤウ 麿まひし人」と見える。こどもたちの仕事とは同一

視しにくいであろうが、晴の舞台において衆人環視のもとに舞うのは、貴族の子弟といえども恐ろしい重圧であったろう。家の名誉を背負い、見守る人々の期待にこたえるのが、「若君」の宮仕えであった。

14 源氏物語 浮舟 江戸時代前期写 未装継紙1巻

間合風の大型料紙（縦36.2、横約49糎）19枚を継ぎ、各紙32行28字程度（字高約29.0糎）に書写。書き入れなし。絵巻の詞書もしくは調度手本として用意されたのであろうが、未装丁のまま伝わる。本文系統は青表紙本。

展示箇所中央に「まだふりぬ物にはあれど／きみがためふかき心に／まつと／しらなん」の和歌、そこから9行目「こぞの冬人まいらせたるわらはのかほはいと／うつくしかりければみやもいとらうたくし給ふなりけり」と、走り使いの童に関する説明がある。童のもたらした手紙が、浮舟との出会いへ匂宮を導く。悲劇の発端である。

IV女君のこども時代

こどもを描く筆の冴え。紫式部も清少納言も、細やかな観察と描写の的確さは抜群です。ここでは、紫上と明石の姫君の少女時代を取り上げました。まわりの大人達との対比も、鮮やかです。

15 伝寂蓮筆源氏物語断簡 若紫 河内本系統 鎌倉時代後期写 台紙貼1葉

升形本列帖装『源氏物語』を分割した斐紙（縦16.5、横15.2糎）、11行16字程度書写。和歌2字下げ2行書き、その末尾は直接地の文に続く。かつて本学非常勤講師として書道をご担当くださった川越敏子先生より寄贈。掲出の断簡には極札を欠くが、本学図書館所蔵のツレに寂蓮（1139頃～1202）の伝称筆者名が記されるので、これに従う。古筆切鑑定の習慣では、折れ曲がりの特徴のある男性的な書風を西行・寂蓮等の歌僧の筆跡としている。しかし、それよりは下った鎌倉時代中期以降の資料と考えたい。河内本系本文の特徴を示す。左から2行目「わかき人／＼はみにしみてめてたし／とおもひきこえたり」を青表紙本では「みにしみてわかき人／＼はおもへり」に作るので、その差異は明瞭。

祖母を失った若紫の君のわび住まいに、光源氏の訪問。女房と源氏との贈答歌が書かれ、最終行「ひめ君うへを」。その続きは、「恋ひきこえてなきふしたまへるに…少納言よ、直衣着たりつらむはいづら」であり、あどけない言葉使いを活写する。

(参考)源氏物語五十四帖 一蕙斎芳幾画 明治14年(1881)大倉孫兵衛刊 折本2冊

白地に鶴・若松等を多色刷りし、檀紙風に型押し装飾のある紙表紙（縦17.6、横12.0糎）、その中央に紅地紙題簽（縦12.5、横2.6糎）を押し、子持枠内に「源氏五拾四帖 乾（坤）」と刻す。乾28折・坤27折、見開き2面を1巻にあてるので全54図。各冊末に刊行者大倉孫兵衛の出版広告を載せる。その広告中に掲出本も「一蕙斎芳幾画／田舎源氏五十四帖／折本全二冊」と見え、柳亭種彦『修紫田舎源氏』に由来する作品であることを明らかにする。各図は確かに『修紫田舎源氏』の墨刷り挿絵を極彩色の

錦絵に変容させたもの。歌川国貞描くところの原図を、葵・源氏香意匠の紅色枠に縁取り、いかにも文明開化の派手な姿に改めるところが見所である。

絵師一蕙斎芳幾(本名落合幾次郎、1833～1904)は歌川国芳に学び、役者絵・美人画を得意とした。展示箇所は六条三筋町二見屋の別荘。向かって右に大夫阿古木、左に若妓むらさき、中央下の禿犬吉を描く。犬吉が『源氏物語』若紫巻の「いぬき」に相当し、逃げた雀を慌てて目で追う。

16 源氏物語抄(紹巴抄) 葵 古活字版 寛永頃(1624～1644)刊 袋綴20冊

栗皮色無地紙表紙(縦24.8、横18.6糎)、題簽は2枚あって、各冊所収の巻名と「源氏物語抄 一(～二十)」を墨書する。54帖分の注を20冊にまとめるので、『源氏二十卷抄』の異名もある。毎半葉10行23字前後に活字を組み(印刷面縦約20、横15.5糎)、朱引き・句読点、墨書き入れ多し。漢字・平仮名交じり、稀に片仮名を使う。川瀬一馬『増補古活字版の研究』は、『六百番歌合』と同じ活字を襲用と言う。大小の活字を混用し、新彫の活字も見られる。

三条西公条(1487～1563)講尺の聞書を基に、『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』等を参照し、里村紹巴(1525～1602)が自説を加えて永禄8年(1565)成立。幾度かの改訂を経、寛永頃古活字版として印行された。これは『源氏物語』古註釈中最も早い出版であり、覆刻本や誤りを補正し振り仮名を豊富に施した整版本の典拠となる。最終冊末尾の原識語によれば、天正8年(1580)5月に武州忍城主成田氏長に授けられたものを底本とする。

40丁ウラ～41丁オモテを展示。「はかりなき歌 海底はかりなきなり…千ひろとも歌 みちひる塩のとは源の心不定とよめる／紫上漸おとなびたる也 咲」は、若紫の君の髪を削ぐところで詠まれた贈答歌に関する注である。「御ぐしの常よりもきよらに見ゆるをかきなで給ひて」光源氏自ら髪を整える。それは「そぎわづらひ給ふ」ほど長く美しいものであった。

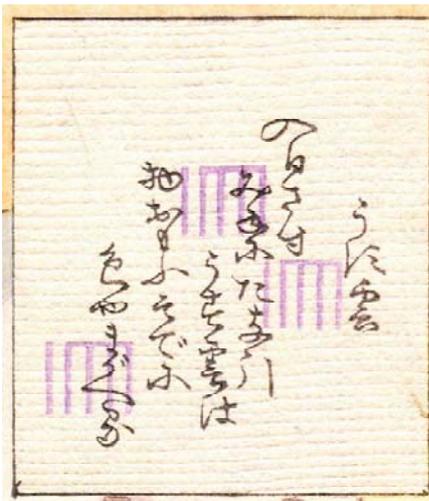
17 源氏物語 薄雲 江戸時代前期写 列帖装1冊

仮綴じ状態で伝来した零本。本文共紙表紙(縦25.7、横17.5糎)中央左寄りに「源氏」、右下に「千蔭」の墨書あり、それぞれ別筆。なお「千蔭」は国学者加藤千蔭(1735～1808)の筆跡ではない。料紙、斐紙。4括墨付34丁、遊紙、前後各1丁。毎半葉10行20次前後、漢字・平仮名交じりに書写し、和歌2字下げ2行書き、その末尾は直接地の文に続く。虫損若干。朱の合点・句読点あり。旧蔵者や伝来を示す印・識語・奥書等なし。本文系統は青表紙本。

第6丁ウラ(見開き右面)6行目以下、「はゝ君みづから／いだきていで給へりかたことのこゑはいとうつ／くしうて袖をとらへてのり給へとひくもいみ／じう覚て」の、胸にせまる行文がある。

(参考)*源氏五十四帖 薄雲 尾形月耕画 明治25年(1892)横山良八刊 1枚

大判錦絵(印刷面縦32.3、横21.9糎)に、大堰の里での母子の別れを描く。物語では沈んだ雰囲気の冬景色であるが、明るく軽やかな色調で画面をまとめている。色白



頼りなさそうな男性が光源氏、直衣の裾に触れているのは3歳の明石姫君、その右に明石御方。上方に「源氏五十四帖 十九」の短冊形と、「うす雲／入日さす／みねにたな引／うす雲は／物おもふそでに／色やまがへる」の色紙形を刷る。色紙形には布目押しの丁寧な加工と源氏香の装飾がある(左の図版参照)。

日本橋生まれの江戸っ子尾形月耕(1858~1920)は、独学で画技を習得し、陶器の下絵・蒔絵デザインから本格的な日本画まで、自在にこなした才能豊かな絵師である。落合芳幾の15(参考)源氏物語五十四帖が濃厚に幕末の雰囲気を残しているのに比べると、月耕の近代的造形感覚は判然としている。

18 絵入横本源氏物語 初音 万治3年(1660)刊 袋綴29冊

藍色無地紙表紙(縦14.6、横21.0糎)中央に素紙題簽(縦10.5、横3.0糎)を押し、「きりつほ／はゞきゝ／一」と刷る。各冊の量により、題簽の横幅は異なるが、どの帖もほぼ制作時の状態をとどめる。本文は每半葉16行15字程度(印刷面の縦12.0、横18.3糎)、四周单边(縦11.6、横17.9糎)中に挿絵あり。傍注・濁点・句読点等を付刻する。版心に文字なし。全巻にわたる朱の書き入れ。『源氏物語』本文54帖に、系図1冊・山路露1冊・引歌1冊・源氏目案3冊を添えて60巻とし、30冊に合せたもの。現在引歌1冊を欠く。

夢浮橋末尾に、8絵入源氏物語を継承した「写本云」以下の原奥書・刊語を載せ、「龍集万治三年庚子／除稔一日／林和泉掾板行」の刊記。本文・絵・系図などを加えて60巻仕立てとすることも、先行の絵入源氏物語と同様である。年月日と書肆名とは書風が異なるので、「渡辺忠左衛門」とあったのを「林和泉掾」と入木修正したのであろう。したがって掲出本は初刷りではない(吉田幸一『絵入本源氏物語考』)。

初音3丁オモテ(見開き左側)11行目「姫君ひきわかれ年はふれども鶯の／す立し松のねをわすれめや」の歌があり、「おさなき御心にまかせてくださしくぞあめる」の評が続く。母明石の御方と別れて4年が過ぎていた。

(参考)*金泥下絵源氏物語 初音 江戸時代前期写 未装列帖1冊

未装丁仮綴じ本。本文共紙表紙(縦23.4、横16.5糎)中央に本文とは別筆にて「はつね 掎」と墨書。装丁された時には表紙と見返しの間に収まるので、通常外から見られることのない部分である。布目打ちを施した料紙と、金泥にて瀟洒な下絵を描いた料紙とを交え、いずれも良質の斐紙。2括20丁のうち、墨付18丁。

空蟬以下6帖を欠く48帖から、1帖を選んだ。18絵入横本源氏物語と同じ場面、第3丁ウラ(見開き右側)9行目「ひきわかれとしはふれどもうぐひすのす／だちしまつのねをわかれめや」の歌が見える。



かゝるに公つゝてのちまは井まはく坊りか
心つゝさ事一屋まゝこまのどほり